

(別刷)

**「楽しく歌いましょう！あなたが主役，生涯学習・歌の会」
講座研究（2）**

—— 歌の高齢初心者講座開講2年目 ——

津田 満璃

生涯学習研究

— 聖徳大学生涯学習研究所紀要 —

第9号 別刷

2011年3月

「楽しく歌いましょう！あなたが主役,生涯学習・歌の会」講座研究(2)

—歌の高齢初心者講座開講 2年目—

津田 満璃

はじめに

聖徳大学オープン・アカデミー (SOA) の「楽しく歌いましょう！あなたが主役,生涯学習・歌の会」(以後「歌の会」と略称) 講座は2008年秋に1クラス開講した。この1年目の講座研究論文は、「聖徳大学生涯学習研究所紀要—生涯学習研究—8」(2010年3月)に発表された。更に、開講2年目、高齢受講者数は徐々に増加してきた。開講1年目の観察分析、及び理論研究に続き、2年目もほぼ同じ方法論により研究は継続された。つまり、毎回講座記録を取り、企画し、受講者との対話を重んじ、反省しながら対応してきた。内外の理論研究も継続している。

2年前にこの講座をスタートさせるにあたり、3つの高齢社会貢献目標を掲げた。1つ目の高齢初心者への「楽しく歌いましょう」講座という機会提供は徐々に受け入れられつつある。2つ目の音楽教育を受けた女性講師の社会参加に関しては3年目現在4クラスで講師2名態勢となっている。そして、3つ目であるSOAへの受講者増加貢献では3年目の2010年秋は受講者58名でのスタートとなった。

「歌の会」講座1年目は3期とも1クラスで、松戸駅前前の聖徳大学10号館ホールで行われた。2年目は各期とも2クラス態勢で推移し、木曜クラスは10号館ホールで、又、水曜クラスは高齢者の足で駅から徒歩10分にある3号館の音楽室で開催された。この研究では2年目のデータ整理・分析をとおり、歌の高齢初心者の生涯学習講座は2010年代の日本でどうあることができるのかの一考察としたい。3年目の2010年秋は4クラス態勢でスタートしており、この研究をこれからの歌の生涯学習の在り方に関する継続発展研究への礎石としたい。

1. 開講2年目3期1年間の経過

(1) 講座観察記録

2009年9月から2010年7月に掛けての3期1年間、木曜日の講座に関しては主に筆者が、水曜日の講座に関して

は主に峯田明子が詳細な講座観察記録を欠かさず取り続け、共有し、内容を検討しあった。筆者はこの2年間「歌の会」の全ての講座に出席し、講座はいかにあるべきかについて観察とともに研究を続けた。この1年間の講座観察記録はワードでほぼ50ページになった。この観察記録は「歌の会」の基礎研究資料として重要であると認識している。これをSOA公式アンケートと「歌の会」独自アンケート分析の際に参考にする。

(2) 受講者数・年代・性別推移

まず、この3期1年間の各受講者数に年代別、性別、更に、継続か新規受講かを加えた「歌の会」講座全体の推移を整理してみよう。

2009年第II期(秋):合計40名

2009/09/24-12/03(木・10回)09:00-10:25

2名のみ申込にて不成立

2009/09/24-12/03(木・10回)10:45-12:10

受講者31名(継続11,新規20,内・新規男性2)

2009/09/30-12/02(水・10回)10:45-12:10

受講者9名(新期開設,木クラスより継続5,新規4)

2009年第III期(冬):合計41名

2010/01/14-03/25(木・10回)09:00-10:25

2名のみ申込にて不成立

2010/01/14-03/25(木・10回)10:45-12:10

受講者25名(継続19,新規6)

2010/01/13-03/17(水・10回)10:45-12:10

受講者16名(継続8,新規8)

2010年第I期(春):合計52名

2010/05/06-07/08(木・10回)09:00-10:25

1名のみ申込にて不成立

2010/05/06-07/08 (木・10回) 10:45-12:10

受講者 35名 (継続 20, 新規 15, 内・新規男性 2)

2010/04/14-06/23 (水・10回) 10:45-12:10

受講者 17名 (継続 9, 新規 8, 内・新規男性 3)

次にこれら全体の推移を下記のように表(表1)にし、分析してみよう。

表1: 受講者数・新規継続者数・年代別表

(2009年度第II期～2010年度第I期)(男性人数は()内に示す)(名)

	合 ク ラ 計 ス	期 合 計	継 続	新 規	50 代	60 代	70 代	80 代	答 無 者 回
2009年/II期 (秋・木)	31 (2)		11	20 (2)	4	14 (1)	9(1)	3	1
2009年/II期 (秋・水)	9	40	5	4	0	4	5	0	0
2009年/III期 (冬・木)	25		19	6	3	10	9	3	0
2009年/III期 (冬・水)	16	41	8	8	2	8	6	0	0
2010年/I期 (春・木)	35 (2)		20	15 (2)	5	15 (1)	11 (1)	3	1
2010年/I期 (春・水)	17 (3)	52	9	8(3)	4	9(1)	4(2)	0	0

受講者数は2009年度第II期(秋)、第III期(冬)から2010年度第I期(春)にかけて、2クラスの受講者合計で40名、41名、52名と推移し、合計受講者数は133名となり、1年目の3期合計全86名に比べ55%の増加である。毎期、止める受講者もいれば、継続者や新規参加者もいて、2008年秋にこの「歌の会」が17名1クラスでスタートして以来徐々に増えてきた。地域に受け入れられつつあるのだろうか。

受講者の年代は50代から80代に渡る。60代と70代を中心とし、60代の方がやや多いといった傾向である。年代リストは事務局への講座申込書への記載によるが、稀に書き込みの無いものがあるが、アンケート共々データ収集は無理なく出来た範囲で行なっている。

比較的若い受講者に関し、「歌の会」1年目は受講者全86名のうち30代3名と40代2名の受講者が参加していた。2年目はこれらの年代の受講者はいない。これは世代間交流の観点からは残念なことであるが、高齢初心者の「歌の会」という講座の趣旨が広く理解されるようになったことを反映しているだろう。

男性受講者はときどき1、2名が1期のみ参加しては止めていたが、2010年度第1期に参加の両クラス合わせて5名のうち4名が2010年度第2期も継続受講し、初めての男性継続受講者となっている。

2. アンケート実施・分析(3期1年分, 2009年9月～2010年7月)

(1) アンケートについて

「歌の会」開講2年目のアンケートは、SOA全体のものと「歌の会」独自のものを3期とも講座の終りに実施した。まず2期分は期の講座最終日に実施した。2期目にアンケート用紙を配付した際、前もって渡してくれば家でゆっくり書いて来られるが、今ここで急に書けと言われたくないという意見が数人からあった。それ故、最終期は最終回の前の週にアンケート用紙2種とも配付し、次回に書き込んだものを提出するというようにした。又、前の期の最終回に欠席した受講者から、言いたいことがあったが修了証だけが送られ、アンケートに答える機会が無かったことに対するクレームがあったので、欠席者には後から修了証と共に事務局から送付してもらった。しかし、最終日に忘れた者からも欠席者からも事務局への郵送による回収はなかった。それが最終回のアンケート用紙回収率が低下している理由でもある。

2009年第III期(2010年冬)の回収アンケートの検討から、それまでは別々にしていた事務局アンケートと「歌の会」独自アンケート(その期に歌った全曲目チェックリスト含)を1名分ずつ1アンケートとして綴じて渡すことにした。各受講者の講座に対する判断を総合的により正確に把握するためである。

回収アンケートは各講師とコーディネーターがコピーを共有し、討議、反省資料としている。

下記のようにSOAアンケートと「歌の会」独自アンケートを集計する。各期毎に2クラスをまとめることもできるだろうが、各クラスの条件により、結果に差が見られるのかどうかを検討したく、ページ数が限られているにも関わらず全てのアンケート結果を期別、クラス別に表記した。それらのデータから抽出できるこの講座に対する評価分析に関し、テーマ毎に1年間の大きな評価の流れを掴むことに重点をおきたい。受講者達の批判や評価であるアンケート結果を判断・理解する際、1年間の講座に対する準備、講座そのものの記録、受講者の批判、講師側の反省、討論などの記録である詳細に渡る講座観察記録を活用する。

(2) SOA公式アンケート集計・分析(3期分, 表2-1・表2-2, 表3-1・表3-2, 表4-1・表4-2参照)

まず、SOA公式アンケート結果を表に集計する。期としては、2009年度第II期(秋)、2009年度第III期(冬)、2010年度第I期(春)の開講時期順に記載する。各期とも木曜日、水曜日の講座順に表に記録する。

表2-1：SOA公式アンケート2009年度第Ⅱ期(秋・木, 2009/09/24～12/03), 回答者22名/出席者22名/在籍者31名

(回答数)/(回答者)					
講座の感想 22/22	満足 11	やや満足 6	普通 4	やや不満 1	不満 0
満足・やや満足の理由 17/13	内容 8	費用 1	教室・施設 2	担当講師 6	
やや不満・不満の理由 1/1	内容 1	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0	
難易度 20/20	理解丁度よい 14	難しかった 2	易しかった 4		
受講理由 25/22	内容に関心 15	担当講師 3	大学主催 2	立地 4	受講料 0
	他に無いから 1				
受講目的 24/22	教養 1	余暇有効 3	交流 1	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 18
	その他 1				

表2-2：SOA公式アンケート2009年度第Ⅱ期(秋・水) (2009/09/30～12/02), 回答者9名/出席者9名/在籍者9名

(回答数)/(回答者)					
講座の感想 9/9	満足 7	やや満足 2	普通 0	やや不満 0	不満 0
満足・やや満足の理由 9/9	内容 2	費用 0	教室・施設 0	担当講師 7	
やや不満・不満の理由 0/0	内容 0	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0	
難易度 8/8	理解丁度よい 5	難しかった 0	易しかった 3		
受講理由 10/9	内容に関心 5	担当講師 3	大学主催 0	立地 1	受講料 0
	他に無いから 1				
受講目的 10/9	教養 0	余暇有効 2	交流 3	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 5
	その他 0				

表3-1：SOA公式アンケート2009年度第Ⅲ期(冬・木, 2010/01/14～3/25), 回答者20名/出席者21名/在籍者25名

(回答数)/(回答者)					
講座の感想 20/20	満足 14	やや満足 3	普通 1	やや不満 2	不満 0
満足・やや満足の理由 15/11	内容 7	費用 1	教室・施設 2	担当講師 5	
やや不満・不満の理由 2/2	内容 1	費用 0	教室・施設 0	担当講師 1	
難易度 20/20	理解丁度よい 18	難しかった 0	易しかった 2		
受講理由 21/20	内容に関心 16	担当講師 3	大学主催 0	立地 2	受講料 0
	他に無いから 1				
受講目的 23/19	教養 1	余暇有効 2	交流 4	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 15
	その他 1				

表3-2：SOA公式アンケート2009年度第Ⅲ期(冬・水, 2010/01/13～3/17), 回答者13名/出席者14名/在籍者16名

(回答数)/(回答者)					
講座の感想 15/13	満足 11	やや満足 2	普通 1	やや不満 1	不満 0
満足・やや満足の理由 14/13	内容 4	費用 0	教室・施設 0	担当講師 10	
やや不満・不満の理由 1/1	内容 0	費用 0	教室・施設 1	担当講師 0	
難易度 13/13	理解丁度よい 10	難しかった 0	易しかった 3		
受講理由 13/13	内容に関心 10	担当講師 2	大学主催 1	立地 0	受講料 0
	他に無いから 0				
受講目的 14/13	教養 0	余暇有効 1	交流 1	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 11
	その他 1				

表4-1：SOA公式アンケート2010年度第I期(春・木, 2010/05/06～07/08), 回答者23名/出席者28名/在籍者33名

(回答数)/(回答者)					
講座の感想 23/23	満足 15	やや満足 5	普通 3	やや不満 0	不満 0
満足・やや満足の理由 20/18	内容 8	費用 0	教室・施設 2	担当講師 10	
やや不満・不満の理由 0/0	内容 0	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0	
難易度 23/23	理解丁度よい 16	難しかった 2	易しかった 5		
受講理由 23/23	内容に関心 18	担当講師 1	大学主催 3	立地 0	受講料 0
	他に無いから 0	その他 1			
受講目的 23/23	教養 1	余暇有効 2	交流 1	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 19
	その他 0				

表4-2：SOA公式アンケート2010年度第I期(春・水, 2010/04/14～06/23), 回答者14名/出席者16名/在籍者17名

(回答数)/(回答者)					
講座の感想 14/14	満足 7	やや満足 3	普通 4	やや不満 0	不満 0
満足・やや満足の理由 10/10	内容 3	費用 0	教室・施設 0	担当講師 7	
やや不満・不満の理由 0/0	内容 0	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0	
難易度 14/14	理解丁度よい 13	難しかった 0	易しかった 1		
受講理由 14/14	内容に関心 11	担当講師 0	大学主催 0	立地 0	受講料 1
	他に無いから 0	その他 2			
受講目的 14/14	教養 0	余暇有効 3	交流 1	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 10
	その他 0				

注：SOA公式アンケートには「ひとつお選び下さい」と指示があるが、複数回答の場合もあり、それも数え、回答者に対する回答数を記した。

さて、この6つのSOA公式アンケート集計表分析から何が言えるだろうか。

「講座の感想」としては、3期1年間を通じ2クラスとも絶対的多数が「満足」か「やや満足」と応えている。「やや不満」が2期までの合計3クラスに1から2票あったが、高い声で歌いたい、コーラスをしたいと初心者ではない受講者から何度か要望があった件であろう。講座を始めた頃は受講者たちのなかに、これまで参加していたサークルのやり方をここでもやってもらいたいという要望があった。しかし、毎期の始めや途中の茶会、食事会の度にこの講座が初心者対象の斉唱クラスであることを繰り返し説明することで、最後の期になると「やや不満」も「不満」も無くなった。全体として講座の趣旨に対する理解が得られてきたと受けとめている。

「満足・やや満足の理由」を全期集計すると、全回答85票中、「内容」に対し32票、「講師」に対し45票という結果が目立つ。これは、現在の内容と講師の教授法に一定の理解が得られていることを示している。

「受講理由」では「内容に関心」が全回答106票中、75票であり、「受講目的」では「趣味・娯楽」が全回答108

票中、78票と突出している。受講者達の日頃の言葉をまとめると、講座で毎週懐かしい歌を安心して歌えることが大変楽しいようで、これらの回答に現れていると言えよう。「受講理由」で次に多かったのは「担当講師」で全回答106票中、12票あった。「講師」に「満足」から、さらに「講師」が「受講理由」になるので、講師教育を大事にしなければならない。「受講目的」で次に多かったのが「余暇利用」で、全回答108票中、13票あり、高齢者が余暇として過ごしたい講座を発展的に提供できるよう更なる研究が必要だろう。

(3)「歌の会」独自アンケート集計・分析(3期分, 表5-1・表5-2, 表6-1・表6-2, 表7-1・表7-2参照)

次に、2009年秋の学期(表5-1, 表5-2)、2010年冬の学期(表6-1, 表6-2)、2010年春の学期(表7-1, 表7-2)とこの1年間3期の各学期の終りに行なった「歌の会」独自アンケートの集計を下記の表にまとめる。こちらも各期とも木曜日、水曜日の講座順に記録する。

表5-1：独自アンケート2009年度第Ⅱ期（秋・木，2009/09/24～2009/12/03），回答者22名/出席者22名/在籍者31名，
（人数に関しては4名以上の回答項目を取り上げること基本とする。複数回答も取り上げる。）（回答者数）

1. 以前は歌った14 歌わなかった8	2. 歌わなかった理由： 下手4 機会が無かった5	3-1. 良かった歌（最多のみ）： 瀬戸の花嫁，翼をください， 月の沙漠，大きな古時計， 銀色の道，各15	3-2. 良くなかった歌（最多のみ）： グリーンスリーブス14 オーソレミオ，あの素晴らしい愛を もう一度，チムチムチェリー，各5	
4. 難しかった理由： 音が高過ぎる5 音が低過ぎる0 リズムが取り難い10 知らない歌2	5. 好きな歌のジャンル： 演歌・歌謡5 童謡・唱歌16 日本伝統音楽1 クラシック6	6. 一番好きな歌： 無回答14 その他いろいろ8	7. クラスで歌いたい歌： 無回答14 その他いろいろ8	8. 家庭で口ずさむ歌： 無回答10 無し2 その他いろいろ10
9. 普段大きい声を出す機会： ある5 ない17	10. この会に参加の結果： 声の前より：出る20 出ない2 歌が上手に：なった12 ならない9 体が健康に：なった19 ならない0 楽しい時間を過ごす：楽しい22 楽しくない0 歌の仲間：できた18 できない3			

表5-2：独自アンケート2009年度第Ⅱ期（秋・水，2009/09/30～12/02），回答者9名/出席者9名/在籍者9名，
（人数に関しては4名以上の回答項目を取り上げること基本とする。）（回答者数）

1. 以前よく歌った7 歌わなかった2	2. 歌わなかった理由： 下手1 機会が無かった1	3-1. 良かった歌（最多のみ）： 遠くへ行きたい，翼をくだ さい，あの素晴らしい愛を もう一度，千の風になって， 各5	3-2. 良くなかった歌： おおシャンゼリゼ2	
4. 難しかった理由： 音が高過ぎる0 音が低過ぎる1 リズムが取り難い1 知らない歌0	5. 好きな歌のジャンル： 演歌・歌謡6 童謡・唱歌4 日本伝統音楽0 クラシック5	6. 一番好きな歌： 無回答2 その他いろいろ	7. クラスで歌いたい歌： 無回答6 シャンソン2	8. 家庭で口ずさむ歌： 無回答3 その他いろいろ
9. 普段大きい声を出す機会： ある3 ない6	10. この会に参加の結果： 声の前より：出る7 出ない0 歌が上手に：なった4 ならない4 体が健康に：なった5 ならない2 楽しい時間を過ごす：楽しい9 楽しくない0 歌の仲間：できた9 できない0			

表6-1：独自アンケート2009年度第Ⅲ期（冬・木，2010/01/14～2010/03/25），回答者21名/出席者21名/在籍者25名，
（人数に関しては4名以上の回答項目を取り上げること基本とする。）（回答者数）

1. 以前よく歌った14 歌わなかった7	2. 歌わなかった理由： 下手3 恥ずかしい1 機会が無かった3	3-1. 良かった歌（最多のみ）： いい日旅立ち19 いつでも夢を17 今日の日はさようなら17 荒城の月，早春賦，花，椰 子の実，勿忘草をあなたに， 各16	3-2. 良くなかった歌： 黒い瞳の3 ケンタッキーの我が家3 コサックの子守歌3
-------------------------	---	---	--

4. 難しかった理由： 音が高過ぎる 1 音が低過ぎる 0 リズムが取り難い 2 知らない歌 6 無回答 12	5. 好きな歌のジャンル： 演歌・歌謡 3 童謡・唱歌 9 日本伝統音楽 2 クラシック 4 無回答 1	6. 一番好きな歌： 無回答 9 その他いろいろ 9 いい日旅立ち 3	7. クラスで歌いたい歌： 無回答 11 昴, サボテンの花, 各 2	8. 家庭で口ずさむ歌： 無回答 11 その他いろいろ 6 ふるさと 3 四季の歌 2
--	---	--	---	---

9. 普段大きい声を出す機会： 無回答 1 ある 8 ない 12	10. この会に参加の結果： 声が前より：出る 17 出ない 4 歌が上手に：なった 15 ならない 5 体が健康に：なった 16 ならない 4 楽しい時間を過ごす：楽しい 19 楽しくない 1 歌の仲間：できた 17 できない 3
---	--

表6-2：独自アンケート2009年度第Ⅲ期(冬・水, 2010/01/13～3/17), 回答者14名/出席者14名/在籍者16名,
(人数に関しては4名以上の回答項目を取り上げること基本とする。) (回答者数)

1. 以前よく歌った 10 歌わなかった 4	2. 歌わなかった理由： 下手 2 無回答 2	3-1. 良かった歌 (最多のみ)： 翼をください 13 切手のないおくりもの, この広い野原いっぱい, 千の風になって, 峠の我が家, 雪の降る町を, 夢路より, 各 12	3-2. 良くなかった歌： 仰げば尊し, 金太郎, 聖者の行進, 千の風になって, 竹田の子守歌, ともしび, トロイカ, 平城山, 久しき昔, ママのそばで, ローレライ, 各 1
---------------------------	-------------------------------	---	--

4. 難しかった理由： 音が高過ぎる 1 音が低過ぎる 0 リズムが取り難い 1 知らない歌 0 無回答 12	5. 好きな歌のジャンル： 演歌・歌謡 1 童謡・唱歌 11 日本伝統音楽 1 クラシック 5 無回答 1	6. 一番好きな歌： 無回答 6 その他いろいろ	7. クラスで歌いたい歌： 無回答 10 その他いろいろ	8. 家庭で口ずさむ歌： 無回答 6 その他いろいろ
--	--	--------------------------------	------------------------------------	----------------------------------

9. 普段大きい声を出す機会： 無回答 2 ある 5 ない 7	10. この会に参加の結果： 声が前より：出る 12 出ない 0 無回答 2 歌が上手に：なった 8 ならない 4 無回答 2 体が健康に：なった 12 ならない 1 無回答 1 楽しい時間を過ごす：楽しい 12 楽しくない 1 無回答 1 歌の仲間：できた 12 できない 1 無回答 1
--	--

表7-1：独自アンケート2010年度第Ⅰ期(春・木, 2010/05/06～07/08), 回答者23名/出席者28名/在籍者33名,
(人数に関しては4名以上の回答項目を取り上げること基本とする。) (回答者数)

1. 以前よく歌った 16 歌わなかった 6	2. 歌わなかった理由： 下手 1 恥ずかしい 1 機会が無かった 3	3-1. 良かった歌 (最多のみ)： エーデルワイス, 今日の日 はさようなら, 北上夜曲, 夏の思い出, ふるさと, 各 19	3-2. 良くなかった歌： 平城山 7 愛の賛歌, 美しき, 涙そうそう, 各 3
---------------------------	--	--	--

4. 難しかった理由： 音が高過ぎる 2 音が低過ぎる 0 リズムが取り難い 3 知らない歌 7	5. 好きな歌のジャンル： 演歌・歌謡 4 童謡・唱歌 17 日本伝統音楽 1 クラシック 3	6. 一番好きな歌： 無回答 9 その他いろいろ	7. クラスで歌いたい歌： 無回答 9 その他いろいろ	8. 家庭で口ずさむ歌： 無回答 5 朧月夜 4 その他いろいろ
--	---	--------------------------------	-----------------------------------	---

9. 普段大きい声を出す機会： ある 7 ない 16	10. この会に参加の結果： 声の前より：出る 22 出ない 1 歌が上手に：なった 16 ならない 7 体が健康に：なった 23 ならない 7 楽しい時間を過ごす：楽しい 22 楽しくない 1 歌の仲間：できた 21 できない 2
----------------------------------	--

表7-2：独自アンケート2010年度第I期(春・水, 2010/04/14～06/23), 回答者14名/出席者16名/在籍者17名,
(人数に関しては4名以上の回答項目を取り上げること基本とする。) (回答者数)

1. 以前よく歌った 8 歌わなかった 6	2. 歌わなかった理由： 下手 1 機会が無かった 2	3-1. 良かった歌（最多のみ）： 学生時代，切手のないおくりもの，今日の日はさようなら，希望，四季の歌，琵琶湖就航の歌，各 10	3-2. 良くなかった歌： アロハオエ，美しき天然，オーラリー，涙そうそう，各 2
--------------------------	-----------------------------------	--	--

4. 難しかった理由： 音が高過ぎる 1 音が低過ぎる 0 リズムが取り難い 3 知らない歌 1	5. 好きな歌のジャンル： 演歌・歌謡 2 童謡・唱歌 7 日本伝統音楽 0 クラシック 3	6. 一番好きな歌： 無回答 5 その他いろいろ	7. クラスで歌いたい歌： 無回答 7 惜別の歌 2 その他いろいろ	8. 家庭で口ずさむ歌： 無回答 5 その他いろいろ
--	--	--------------------------------	---	----------------------------------

9. 普段大きい声を出す機会： ある 5 ない 9	10. この会に参加の結果： 声の前より：出る 14 出ない 0 歌が上手に：なった 8 ならない 5 体が健康に：なった 10 ならない 4 楽しい時間を過ごす：楽しい 14 楽しくない 0 歌の仲間：できた 14 できない 0
---------------------------------	---

さて，この「歌の会」独自アンケート全6表のアンケート集計から，受講者の講座に対するどのような判断が見られるだろうか。ページ数の関係から，講座観察記録を活用しながら通期検討結果をできるだけ簡略に記述しよう。

1. 「以前は歌った」と「歌わなかった」の回答を3期1年間の木曜クラス表(表5-1, 表6-1, 表7-1)と比較すると，14：8，14：7，16：6で，パーセント比にすると64：36，67：33，73：27と期を追うごとに「以前は歌った」受講者は増加している。次に，水曜クラス表(表5-2, 表6-2, 表7-2)では，7：2，10：4，8：6で，パーセント比にすると78：22，71：29，57：43で，「以前は歌った」受講者は減少している。この正反対の結果は何を意味しているのだろうか。アンケートは無記名なので，継続者か新規者かは

分らないが，両クラスの結果からすると，それだけの問題とは数字上言えない。又，この質問は，開講後早い段階では参考になる項目であったが，条件を付けても必ずしも回答者が守るとは言えないので，継続者が増えていくことでもあり，質問事項としてはもはや適当とはいえないだろう。

2. 「歌わなかった理由」として，「恥ずかしい」が1名ずつ2つの表に見られる以外は，「下手」と「機会が無かった」が選択されている。日頃の話し合いの中でも，下手でも良いと読み取れる「歌の会」の広報誌を見て勇気を出して参加した，中には何期も迷ったあげく下手でも大丈夫そうだと恐る恐る参加したという受講者の声が聞かれる。

3. 歌の選曲は，各クラス講師がやっている。それには，

これまでのアンケート結果やクラスでの話し合いを考慮に入れている。曲目には常に季節の歌やリクエストも入れており、毎回かなり入れ替わるのが普通である。最も「良かった歌」に「翼をください」が両クラスとも合わせて3回入った。好かれているが、難しいところもあり繰り返し歌ったので親しみが持たれたのだろう。「今日の日はさようなら」も同じく3回入っているが、これは毎回最後に歌っており、好まれているのは良いことである。さて、前者に比べ「良くなかった歌」について票はずっと少なくなるが、「グリーンズリーヴス」は14/22と際立って嫌われている。次に嫌われたのは「平城山」で7/23である。「あの素晴らしい愛をもう一度」や「千の風になって」のように、「良かった歌」と「良くなかった歌」の両方に入る曲もある。その他にも「良くなかった歌」に入った曲目を見るとリクエストされたもので、繰り返し歌っても難し過ぎたと思われるものがある。ここでも、歌いたい歌と、歌える歌は違うということが分かる。結果はともかく歌ってみたいという多くの受講者の声も尊重しなければならず、それらの歌が無理なく試せるようにいろいろ工夫していくことも大切だろう。

4. 「難しかった理由」として「音が高過ぎる」という受講者は特に1年目は多かった。2年目の木曜クラス1期目も5票ある。しかし、ほぼ上のドまでにしてからは不満は1から2票と減ってきた。「リズムが取り難い」という評が合わせて20票あったが、リズム感の養成はこれからの課題である。「知らない歌」は合計16票であった。譜面を見ている、記憶に頼っていることが分かる。新しい歌に慣れるようにゆっくり何週かに渡り繰り返すなどの配慮が必要だろう。

5. 「好きな歌のジャンル」では、年間6表合計で「演歌・歌謡」は21票、「童謡・唱歌」は64票、「日本伝統音楽」は5票、「クラシック」は26票となっている。「童謡・唱歌」について「クラシック」が好まれていることと「日本伝統音楽」が好まれていないのは注目に値するだろう。この傾向については観察を継続していきたい。

6. 「一番好きな歌」、7. 「クラスで歌いたい歌」、8. 「家庭で口ずさむ歌」に対し6表合計で無回答がそれぞれ全103名の回答者のうち、45票、57票、40票であった。それ以外にはいろいろな曲名が書かれており、これからの曲選びの参考になる。しかし、それぞれの項目に曲名を書かない受講者がこれだけいるということは、具体的に聞かれるより、「好きな歌のジャンル」だという「童謡・唱歌」や「良かった歌」リストなどを参考に主催者側に選んでもらいたいということであろうか。

9. 「普段大きい声を出す機会」が「ある」と「ない」の

比率は、それぞれ全103名の回答者のうち、33票、67票であった。そして、10.において全回答のうち92票、つまり、89パーセントが「声が前より出る」ようになったと回答している。「普段大きい声を出す機会」が「ある」者と「ない」者を合わせての89パーセントである。日頃から声が段々出なくなると心配している高齢者達が、声が出るようになったと自覚してくれているわけだが、無理の無い呼吸法や発声法をさらに研究していきたい。

10.の「歌が上手になった」と「ならない」の回答比であるが、63票と34票となっている。つまり、回答者のうち61パーセントが「歌が上手になった」と評価しており、33パーセントはうまくないと感じている。「声が前より出る」ようになったのは回答者の89パーセントで、「歌が上手になった」と自己評価するものが回答者の61パーセントである。更に、受講により「健康になり」、「楽しい時間を過ごし」、「歌の仲間ができた」の項目では圧倒的に肯定的な回答が多く、85票、98票、91票、つまり、回答者のパーセント比としては、83、95、88パーセントとなっている。この結果から、受講者たちがこの講座受講を有意義だと受けとめていることが分かる。

週1回85分の講座を3期1年間受講の結果としてはかなりポジティブな評価であろう。受講者たちが楽しい時間を過ごせる講座に出席することを生活の楽しみにできるように、講座自体の充実と講座の雰囲気作り、受講者間のコミュニケーションがさりげなく取れるように更に研究を重ねていきたい。

(4) 講座開始後2年目1年間のアンケート2種分析結果への追記

不満足者への対処について考えてみよう。アンケート結果全体から、「歌の会」講座は受講者からかなり肯定的に評価されていることが分かる。しかし、不満足の方が少しはいる。これは一つにはこの講座の特質である歌の高齢初心者の講座であることからもきている。ずっと歌い続けてきたが、程度が高くハードなサークルで続けるのは辛くなり楽そうなこの講座に通い始めた受講者たちがいる。彼女達にとってはこの講座は大変に物足りないのに、コーラスがしたい、高い声で歌いたいと提案しては回りの初心者を不安がらせる。歌に自信のある高齢者の主張はときに変に大変強硬である。そうすると自信の無いものは口を閉ざす。会の趣旨がほんの少数者の主張により様変わりしては大多数の参加者がやっていけなくなる。そこで、各期の始めや途中の挨拶などの機会を捕らえては、この講座は高齢初心者が安心して歌えるようにやっており、歌上手の人が中心に

なって楽しむところではないので、歌の上手な人も歓迎だけれど講座の趣旨を理解し協力して欲しいと、コーディネーターは繰り返し説明している。継続している受講者たちが講座の趣旨を新規参加の要求のきつい受講者たちに説明してくれることもあり、次第に歌の初心者が継続できる講座として定着してきたのが数字に表れている。

木曜日クラスと水曜日クラスに対する2種類のアンケート全てに渡りクラス毎・期毎の表を作成した。この2クラスの違いを比較検討してみよう。木曜クラスは駅前14階の200人ホールで、水曜クラスは駅から高齢者には徒歩10分程の音楽室で行われている。どちらも問題なく音を出せる環境で、グランドピアノが供されている。木曜クラスがまずスタートし、2年目から水曜クラスもスタートした。高齢者には駅に近いということは大きいメリットで、歩行に苦勞する受講者たちは、駅前の木曜クラスを受講している。木曜クラスは2008年秋にスタートし、場所がガラんと広く、年齢層に幅があり、人数は水曜クラスより多い。水曜クラスは2009年秋にスタートし、年齢が比較的近く、人数が少ないのでコミュニケーションが図りやすい。その結果、両クラスとも「楽しい」という回答が多いというだけでなく、水曜クラスの方が「歌の仲間」が「できた」という回答率がさらに上っている。木曜クラスのホールは広く収容能力があるので、クラスを増やさなくて良いのではないかという事務局の考えもある。「歌の会」の趣旨として受講者間のコミュニケーションも歌に次いで大切だと考えている。「歌の会」の受講者増加に際し、クラス規模を大きくしない方が良いのかについては次の研究課題である。

3. 文献研究

この「歌の会」講座は既存の理論やモデルに基づいて始めたのではない。筆者の個人的な幾つかの日本人女性達との歌のサークル体験、ヨーロッパの日本語学習者と邦人フランス語学習者の交流会を主催し参加者たちと歌っていた体験、ヨーロッパの修道院における4年間の歌のあるコミュニティ生活体験などを基に、それまでの孤独・命・交流の場・コミュニケーション・高齢社会といったキーワードで表すことのできる文化社会学的な研究を踏まえスタートに至った。そしてこの講座が、今の時代に合った普遍的な活動として発展できるだろうと考えている。現場研究と共に、日本及び世界のこの方面の動きや研究成果の比較研究を進め、この講座の基本概念研究のあり方を探りたい。

昨年度の「歌の会」講座研究では音楽療法関係の文献を中心に検討した。この1年間は、更に歌の高齢初心者の方

の教授法・生涯学習・社会文化・倫理・哲学という範囲で、「歌の会」の基礎研究をテーマに資料探索を試みた。

高齢者の記事は新聞などのマスコミにもよく登場する。活動と研究の同時代性を確保するためにも関連記事に注意を払っている。又、書籍だけでなく、音楽ソフトに関しても研究対象を広げ始めた。

(1) 日本経済新聞切抜き

日本経済新聞から例として下記に関連記事を挙げる。

1. 国立社会保障・人口問題研究所「人口減社会の未来図」シリーズ、朝刊「経済教室・ゼミナール」欄
「9. 増える百寿者 女性の5人に1人が100歳に」、2010年7月19日
「11. 少子化対策 減少前提の社会づくりと両立を」、2010年7月21日
「12. 30年後の地域 14歳以下の人口、3県で半減」、2010年7月22日
「16. 地域の家族・世帯 高齢世帯の増加、都市で顕著」、2010年7月28日
「18. 先進国の高齢化 先頭に立つ日本、世界のモデルに」、2010年7月30日
2. 「団地空洞化と闘う 上 問いかけが孤立救う センサー高齢者見守る」、夕刊「らいふプラス欄」、2010年6月15日
3. 永倉克枝「『要介護』にならないために健康長寿のコツ 友人との交流多く趣味の団体に参加」、朝刊「健康」欄、2010年9月5日
4. 吉川敏一「抗加齢を学ぶ 自分に合った楽しい活動を」、夕刊、2010年10月15日
5. 岩田三代「新しい『縁社会』は築けるか 行政頼みからの脱却を」、朝刊「中外時評」、2010年10月24日

(2) 書籍

1. 川本隆史『現代倫理学の冒険—社会理論のネットワークへ』創文社現代自由学芸叢書、創文社、1995、2000
「<現代をどう生きるか>を問い続けていく営み—これが《現代倫理学》なのだ。」¹⁾と著者は述べ、ケアと正義についても倫理的研究を理論的に掘り下げている。このテーマに関しては、さらに詳しく読み込んでいきたい。
2. 丸林実千代「生涯音楽学習としての高齢者の音楽的ライフ・レビュー」『生涯音楽学習入門』、音楽之友社、1999、pp.131-142

高齢者が回想により過去を深く振り返り、自己確認

をすることが、現在からの人生にも役立つことが、自分史執筆の例などから述べられている。音楽の生涯学習においてもライブ・レビューが役に立つのではないかと例を挙げている。

3. 高萩保治・中嶋恒雄 編著『音楽の生涯学習・理論と実際』, 玉川大学出版部, 2000

音楽全般に渡り基礎理論から実際に到るまで広く生涯学習について述べられている。まず全体的な理解に役立つ。専門の音楽教育者が生涯学習に関わる場合の再教育の必要性についても述べられている。²⁾

4. ブリュンユルフ・スティエグ / 阪上正巳他訳『文化中心音楽療法』, 音楽之友社, 2008, (Stige, BRYNJULF “Culture-Centered Music Therapy”, Barcelona Publishers, 2002)

コミュニティ音楽療法という言葉には魅かれるものがある。我々が置かれた場に相応しい音楽学習環境を作り出そうとすると、それなりに参考になるだろう。

5. 大滝昌之『スウェーデンの社会福祉と音楽療法 —音楽療法士・福祉職としての体験から—』, 音楽之友社, 2003

スウェーデンの社会福祉と音楽療法を現地での体験を軸に紹介している。文化や歴史社会状況の日本との違いをふまえ、日本の諸事情と比較しながらスウェーデンの現状をなるべく分かりやすく説明することになり成功している。音楽療法士は国家資格ではないこと、老人ホームを無くするなど介護施設などの施設のあり方が違ってきていることやその理由がよく分かる。この国で音楽が社会弱者とどのような関わりを持つことになっているのかは参考になる。

6. 大湊幸秀『音楽療法・回想法に活かす高齢者の生活史事典』, 日総研出版, 2005

1868年(明治元年)から1983年(昭和58年)までの主な出来事と流行った歌のリストは、学習者の年齢と歌の流行った年齢を突き合わせるのに役に立つだろう。又、月日別、テーマ別にも検索できる。

7. 川本隆史『ケアの社会倫理学 — 医療・看護・介護・教育をつなぐ』(有斐閣選書), 有斐閣, 2005, 2006

倫理的優しさとケア感覚について述べられている。医療従事者の持つケアの心得と同じものではないとしても、「歌の会」は高齢者対象の週1回1コマの緩やかな結びつきのコミュニティ形成を目指しているので、講座運営にはケアの心構えについて考えておく必要があるだろう。この中で武井もバーンアウトについて書いているが³⁾, 60代から80代の受講者を中心に

大きな会にしていこうとすると、この問題は避けて通れないだろう。

8. 北村英子『うたいましょう! ポピュラーソング(介護予防・健康福祉ブック3), (音楽療法的アプローチ集 Vol.1)』, ひかりのくに, 2005

9. 北村英子『介護予防アクティビティにも生かせる音楽療法的音楽活動(介護予防・健康福祉ブック4), (音楽療法的アプローチ集 Vol.2)』, ひかりのくに, 2006

上記2冊は音楽療法の解説付き歌のテキストであるが、音符の記載方法はドレミを書き込むなど参考になる。

10. 南田勝也「音楽と社会のつながり—定量調査の視点から」, 小西潤子他編『音楽文化学のすすめ』, ナカニシヤ出版, 2007, pp.177-194

音楽と愛好者の社会階級の間隔を考慮せざるをえないのではないかと「歌の会」の受講者の分析から考え始めており、音楽社会調査についてのこの研究史紹介は興味深い。

11. ジョン・T・カシオポ & ウィリアム・パトリック, 柴田裕之(訳)『孤独の科学——人はなぜ寂しくなるのか』, 河出書房新社, 2010

受講者たちが、「このお授業は良い、こんなのは無いですよ」、と言って喜んでくれるとき、このクラスに掛ける受講者たちの意気込みと彼女達の日常の孤独を感じる。授業への参加とそれを基盤に広がる人間関係が彼女達の日常を少しでも豊かにすることに役立つのが目的でもあるが、週1回の講座の限界もあるので、主催者側としての限界を忘れないようにしたい。それにしても孤独について学習するの必要を感じた折り、ずばりのタイトルのこの訳書が出版された。

これは孤独と社会的つながりをテーマに20年余りにわたる学際的科学的調査に基づく研究のまとめである。⁴⁾

(3) 音楽ソフト

1. 『耳のチカラ EarMaster 5』, e frontier

音程を聞き取ったり、リズムをつかんだりする練習ができるソフトである。高齢初心者の講座において基本をどのように学習できるか、音楽教育ソフト面からも検討を始めた。

2. 『finale PrintMusic 2010 日本語版』, e frontier

高齢初心者の音程に合わせ楽譜を作り直したり、基本学習用の楽譜を作成する必要がでてきたので、記譜ソフト検討を始めた。

終りに

前年に引き続き「歌の会」講座のまとめ・分析・研究を主に行った。そこから，この講座を支える基礎理論研究と共に，高齢初心者と講師のための教授法の開発研究が必要となってきた。

「歌の会」は歌とコミュニケーションの機会を高齢初心者に提供することを第一の目的に始められた。そして，いかに受講者の要望に答えられるかを問いながら進めてきた。この講座を継続発展させることに意義を感じているが，講座継続のためにはやはり楽しいだけではなく，高齢者対象ながらも講座らしく学習と進歩の喜びを味わえることが必要と分かってきた。そのために高齢になってから歌い始める受講者用教授法の開発を目指す必要がでてきた。さらに，高齢初心者といっても対象年齢層には30歳程の広がりがあり，講師にとっても新しい教授対象者を前にするには倫理・心理面を含めた教授法が必要であろう。又，この「歌の会」を発展させる意味づけについても考えさせられる。この講座研究は緒についたばかりであり，それらは今後の研究課題となろう。

これからの具体的な課題として，一つには，このような講座の受講者が安心して習える教本を現場で開発改良実験するための基礎研究を始めたい。現在までの教科書や音楽教育ソフトを検討し，目の前の高齢受講者の要望にあうテキストを作成するための理論構築に向けてまず基礎データを蓄積したい。その一方で，高齢社会における生涯学習や高齢者の生き方について文化社会学的基本研究からもこの研究を理論的に支えていきたい。

生涯学習で例えば60歳ごろからスタートしたとして，30年に渡り習い続ける可能性がある。20年後30年後が考えられるならそれはもう未来と言える。子どもたちは未来のために学習しているとして，高齢者も現在だけでなく未来を見据えた学習を考えると時が来ている。いくらか学習スピードが落ちているといっても，歌って楽しく，又，コミュニケーションが図れる楽しみがあるだけでなく，生涯学習の「歌の会」にもそれなりの学習哲学と教授法研究が必要だと思われる。それは，子供たちのための教育方法とは違ったものとなり，新しい時代の高齢社会への一提案となるだろう。高齢社会はずっと続くわけではないだろうが，ここ暫くはこの分野の需要があるだろう。「歌の会」側からもよりよい講座として提供すべく研究を継続していきたい。

（追記）年間を通し毎回，授業についての記録を峯田明子と共に欠かさず付けた。事実の記録だけでなく，互いに

問題点を取りだし研究すべき点についても意見を交換した。この論文も昨年に引き続き氏と共同執筆の予定であったが，事情により今回は筆者の単著となった。筆者としては，このような内容の論文には現場と理論研究から多くの智慧を結集すべく，この分野の実践研究者たちの協力のもとに進めていくのが良いと考えている。

〔引用文献〕

- 1) 川本隆史『現代倫理学の冒険—社会理論のネットワークへ』，創文社，1995, 2000, p.iv
- 2) 高萩保治・中嶋恒雄編著『音楽の生涯学習・理論と実際』，玉川大学出版部，2000, p.28
- 3) 武井麻子「第5章、感情労働としてのケア」，川本隆史『ケアの社会倫理学，医療・看護・介護・教育をつなぐ』，有斐閣，2005, 2006, pp.159-180
- 4) ジョン・T・カシオポ & ウィリアム・パトリック，柴田裕之（訳）『孤独の科学——人はなぜ寂しくなるのか』，河出書房新社，2010, pp.9-12

聖徳大学生涯学習研究所 平成22年度活動報告

【主催事業】

■聖徳大学楽習フェスタ2010

～第12回聖徳大学生涯学習フォーラム～

日 時：平成22年6月19日（土） 13：15～16：30
平成22年6月20日（日） 10：00～16：00
会 場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主 催：聖徳大学生涯学習研究所
共 催：NPO法人全国生涯学習まちづくり協会
後 援：千葉県教育委員会、松戸市、松戸市教育委員会
市川市教育委員会、取手市教育委員会
柏市教育委員会、全国生涯学習まちづくり研究会
松戸駅周辺にぎやか推進協議会
協 力：新京成電鉄株式会社、株式会社ブルボン
聖徳大学オープン・アカデミー
聖徳大学人文学部生涯教育文化学科
聖徳大学児童学部児童学科児童文化コース
聖徳大学生涯学習研究同好会「りりーず」
内 容：・記念講演「地域×もてなし×学校教育」
教育技術法則化運動（TOSS）代表 向山洋一
・記念シンポジウム「地域×もてなし」
・地域ふるさと自慢博覧会
・発表！夢のお菓子
・my プチ style コンテスト
・聖徳大学オープン・アカデミー体験コーナー
・かえっこバザール ほか
参加者：1日目 210名
2日目 838名（うち松戸駅西口デッキ特設ステ
ージ会場来場者275名）

■生涯学習研究所課題別研究会「地域×もてなし」

日 時：①平成22年 4月16日（金）
②平成22年 5月21日（金）
③平成22年 6月19日（土）
④平成22年 7月16日（金）
⑤平成22年 8月20日（金）
⑥平成22年 9月17日（金）
⑦平成22年10月15日（金）
⑧平成22年11月19日（金）
⑨平成22年12月17日（金）
⑩平成23年 1月21日（金）
⑪平成23年 2月18日（金）
⑫平成23年 3月18日（金）
18：00～20：00
会 場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主 催：聖徳大学生涯学習研究所
内 容：①もてなし力
聖徳大学生涯学習研究所所長 福留 強
②NPO活動～CoCoTが手がけること
NPO法人CoCoT副代表理事 小山淳子
③地域×もてなし×学校教育
教育技術法則化運動（TOSS）代表 向山洋一
④市民が主役のまちづくり
聖徳大学生涯教育文化学科教授 清水英男
⑤マスコミとまちづくり
埼玉新聞社編集局文化くらし部長 佐藤達哉
⑥景観に配慮したまちづくり
NPO法人日本景観フォーラム事務局長 豊村泰彦
⑦地域の“いろ”を探す
聖徳大学兼任講師 花見保次

⑧国際交流とまちおこし

NPOコネカ・クラブ理事長 飯屋 茂

⑨2010年を振り返る

聖徳大学生涯学習研究所所長 福留 強

⑩もてなしの心

聖徳大学女性キャリア学科教授 茂木和行

⑪人にやさしいまちづくり

聖徳大学総合文化学科准教授 蓑輪裕子

⑫学んだことを活かす「市民大学」の研究と今後の展開

聖徳大学生涯教育文化学科准教授 齊藤ゆか

参加者：各回約20名

■集まれ！アートパーク 音であそぼう♪

日 時：平成22年7月5日（日） 10：30～14：30
会 場：松戸市中央公園
主 催：聖徳大学生涯学習研究所
共 催：聖徳大学児童学部児童学科
聖徳大学人文学部生涯教育文化学科
後 援：松戸市、松戸市教育委員会
松戸市社会福祉協議会
協 力：まつど市民活動サポートセンター（CoCoT）
松戸駅周辺にぎやか推進協議会
スーパー紙とんぼの会
松戸子育てさぼーとハーモニー
参加対象：幼児、小学生
内 容：音をテーマにした12のワークショップ
参加者：473名
スタッフ94名（教員6名、学生88名）

■まちづくりネットワーク情報交流会

日 時：平成23年2月5日（土） 13：00～17：00
会 場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主 催：聖徳大学生涯学習研究所
共 催：NPO法人全国生涯学習まちづくり協会
関東シニアライフアドバイザー協会
まつど学びの旅推進協議会
内 容：・基調講演「地域にできること」
・実践活動発表会
参加者：約60名

■魚を食べて地域活性化プロジェクト

日 時：平成23年2月10日（木）・12日（土）
14：00～18：00
会 場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主 催：聖徳大学生涯学習研究所
共 催：社団法人本州鮭鱒増殖振興会
NPO法人水産衛生管理システム協会
内 容：「サケ」を使った地域活性化のための料理教室
参加者：約30名

【共催事業】

■旅のもてなしプロデューサー養成講座

実施日：平成22年9月18日（土）～19日（日）
会 場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主 催：NPO法人全国生涯学習まちづくり協会
共 催：聖徳大学生涯学習研究所
内 容：生涯学習研究所が財団法人日本余暇文化振興会、

近畿日本ツーリスト株式会社と協働で開発した「旅のもてなしプロデューサー」資格取得のための特別講座。

※旅のもてなしプロデューサー

旅行先・地元で受け入れプランを立て、客を迎え、接待するためのスキルを習得した「旅のサービス・ナビゲーター」

参加者：18名

■「国内旅程管理主任者」資格取得研修

実施日：①平成22年9月15日（水）～17日（金）

②平成23年2月5日（土）～6日（日）

会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター

主催：NPO法人全国生涯学習まちづくり協会
株式会社新旅行資格会

（観光庁長官登録「旅程管理」研修機関）

共催：聖徳大学生涯学習研究所

内容：国家資格「国内旅程管理主任者」資格取得のための講座及び試験

※国内旅程管理主任者

国土交通大臣認定の準国家資格であり、「企画旅行」における「旅程管理義務」の随行責任者として必須の資格

参加者：①11名 ②12名

■まちづくりコーディネーター養成講座

実施日：①平成22年7月3日（土）～4日（日）

②平成22年11月27日（土）～28日（日）

会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター

主催：NPO法人全国生涯学習まちづくり協会

共催：聖徳大学生涯学習研究所

全国生涯学習まちづくり研究会

内容：「まちづくりコーディネーター」資格取得のための講義及び演習

※まちづくりコーディネーター

まちづくり、教育支援、団体活動支援など地域に協力する指導者に与えられる資格

参加者：①20名 ②21名

■第37回松戸まつり

①つくってあそぼう2010in松戸まつり

日時：平成22年10月2日（土）～3日（日） 11：00～17：00

会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
2階ギャラリー

主催：聖徳大学生涯学習研究所

協力：聖徳大学人文学部生涯教育文化学科

内容：かえっこパズール、子どものあそび場（魚つりゲームなど）、折り紙で壁飾り、パウチカード作り、松戸まつりの絵をかこう

参加者：1日目 141名（大人86名、子ども55名）

2日目 163名（大人81名、子ども82名）

②フレンドパーク

日時：平成22年10月2日（土）～3日（日） 11：00～17：00

会場：松戸駅西口伊勢丹通り商店街

主催：松戸市、松戸商工会議所<松戸まつり>
伊勢丹通り商店会<フレンドパーク>

協力：聖徳大学生涯学習研究所

聖徳大学生涯教育文化学科

内容：・キッズスクエア（ふわふわラビットなど4点）の遊具運営補助（両日）

・SEITOKUサウンドフェスティバル（ハワイアンダンスなど）のステージ運営（3日のみ）

参加者：1日目 約1,500名

2日目 約2,000名

（うちサウンドフェスティバル約750名）

■青物王国☆豊後水道を握る～日本人は魚を食え！in東京タワー

日時：平成22年11月21日（日） 10：00～16：00

会場：東京タワー前特設会場

主催：「青物王国☆豊後水道を握る～日本人は魚を食え！in東京タワー」実行委員会

共催：聖徳大学生涯学習研究所

後援：佐伯市、大分県、港区、港区観光協会

特別協力：東京タワー

協力：ホテルアイビス、六本木探検隊、サバティニーニ六

本木、NPO法人水産衛生管理システム協会

（株）築地フレッシュ丸都、（株）京浜トレーディング、

（株）松栄運輸、JAおおいた、矢野大和事務所

JFおおいた佐賀関支店、JFおおいた鶴見支店、

JFおおいた米水津支店、中嶋水産（株）

内容：魚食普及と豊後水道の青物魚のPRイベント

参加者：約8,000名

■全国市町村協議会フォーラム「空き」活用とまちづくり～廃校の利活用を考える～

日時：平成22年12月16日（木） 10：00～16：30

会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター

主催：全国生涯学習市町村協議会

共催：聖徳大学生涯学習研究所

社会教育施設の活性化研究会

後援：文部科学省、財団法人地域活性化センター

内容：・事前分科会「まちづくり事例研究・自由討論」
・基調提言「地域の活性化と廃校の効果的な活用について」

・事例研究「わがまちの廃校活用に関する現状と課題」

参加者：約110名

■子どもをほめて育てよう研究大会in黒石

日時：平成23年2月26日（土） 16：00～18：30

会場：津軽伝承工芸館 多目的ホール

主催：黒石市教育委員会

共催：黒石市子ども会育成連合会

NPO法人全国生涯学習まちづくり協会

聖徳大学生涯学習研究所

主管：黒石市教育委員会社会教育課

黒石市子ども会育成連合会指導研究部会

内容：・基調講演「子どもをほめて育てる家庭・地域の力」
・パネルディスカッション「いま、地域で大人は子どもにどのように関わっているか」

参加者：約100名

■“子育て”文化のまちづくりフェスタ～ふるさと感じて～

日時：平成23年2月27日（日） 10：00～14：00

会場：松伏町中央公民館 田園ホール・エローラ ほか

主催：松伏町文化のまちづくり実行委員会

共催：松伏町、松伏町教育委員会、聖徳大学生涯学習研究所、NPO法人全国生涯学習まちづくり協会

主管：文化のまちづくり「You遊」倶楽部

内容：未来を奏でるコンサート、入門コンサート、子ども縁日、まつぶし郷土かるた大会、体験遊び

参加者：約1,300名

聖徳大学生涯学習研究所 研究紀要 投稿規程

I 研究紀要

1. 聖徳大学生涯学習研究所紀要（以下、紀要と略す）は、聖徳大学に所属する者が行った研究を発表する機関誌である。
2. 研究内容は原則として、当該年度の生涯学習研究所のテーマに沿うものとする。
3. 紀要は学内に配布するのみならず、広く、他大学・研究機関等に寄贈する。
4. 紀要の編集は、生涯学習研究所紀要編集委員会が行う。なお、生涯学習研究所紀要編集委員会は生涯学習研究所長並びに生涯学習研究所運営委員会の委員若干名をもって構成する。

II 投稿資格

1. 執筆者は専任教職員（教授・准教授・講師・助教・助手）とする。
2. ただし共同研究者（共著者）については、本学所属以外の研究者（ただし、本学大学院を別として、学生を除く）であつてもよい。

III 投稿論文

1. 投稿論文は、投稿者自身のオリジナルな研究に基づくもので、未発表のもの1本に限る。ただし、すでに口頭で発表していても、その旨明記している場合は可とする。
2. 内容は、原則として研究論文及び実践研究とする。紹介・解説・書評・統計上の記録などは原則として除外する。
3. 投稿論文の掲載の採否は、生涯学習運営委員会において承認された査読者が査読のうえ、生涯学習研究所紀要編集委員会の審査を経て決定する。
4. 投稿論文は、投稿規程に準じたものでなければならない。投稿規程が守れない場合は、掲載取消とする。
5. 掲載が認められた研究論文は、原則として日本十進分類法に従い掲載順は生涯学習研究所紀要編集委員会が決定をする。

IV 申し込み及び提出期限

1. 紀要投稿の申し込み及び原稿の提出期限は、原稿執筆の依頼書その他で知らせる。提出の期日はいかなる理由があつても守らなければならない。
2. 投稿の申し込みは、研究紀要投稿申込書に執筆者（共著者を含む）、題名（仮題も可）、原稿の予定量などを明記して申し込む。

V 原稿執筆の要領については、原則として下記のとおりとする。

1. 完成原稿はペン書き（ボールペンを含む）か、コンピュータ/ワープロ印字とする。
 - 1) 原稿量は、題名、副題、執筆者名、要旨、文献、書誌リスト、注、表、図・写真等を含む。
 - ①ペン書きの場合は、原稿用紙（原則としてA4判横書き26文字×22行）を用い、題名、副題、執筆者名、要旨、文献、書誌リスト、注、表、図・写真等を含めて40枚以内とする。
 - ②コンピュータ/ワープロで作成する場合は、原則としてA4判横書き（30文字×40行）を用い、題名、副題、執筆者名、要旨、文献、書誌リスト、注、表、図・写真等を含めて19枚以内とする。
 - ③欧文書きの場合は、原則としてA4判横書き（65字×40行）とし、題名、副題、執筆者名、要旨、文献、書誌リスト、注、表、図・写真等を含めて20枚以内とする。
 - 2) コンピュータ/ワープロで作成した原稿は、指定の電子媒体に、氏名、使用機種、使用ソフトを書いたラベルを貼り、1部A4判にプリントアウトしたものを添えて提出する。
2. 執筆者は聖徳大学生涯学習研究所紀要タイトル用紙に、必要事項を記入し提出する。
3. 表、図は、参照場所に挿入する。
 - 1) 原稿にとじる図、写真は1枚に1点ずつ載せる。
 - 2) 原図、オリジナル写真は厚紙にはさんで提出する。
 - 3) デジタルデータを用いることができる。

4. 完成原稿は、聖徳大学生涯学習研究所紀要タイトル表、原稿（表、図、図の解説文も含む）の順にまとめ、コンピュータ／ワープロを使用した場合は電子媒体もあわせて所定の期日までに提出する。上記の形式を満たしていないもの、及び期日を過ぎた原稿は受け付けない。

VI 原稿記載要領

1. 横書きを原則とするが、必要な場合は縦書きも認める。
2. 常用漢字、現代かなづかいを原則とする。特殊な文字・記号を用いる場合は、その旨を赤字で明記する。
 - 1) 基本的にフォントはMS明朝を使用する。
 - 2) 数字・英字等は活字体で記し、フォントはセンチュリーを使用する。
3. 注は本文中の適当箇所の右肩に1), 2)のように番号で示し、原則としてそのページの末尾にまとめる。
4. 参考文献は、必要があればまとめて番号を付けて列挙する。なお注及び参考文献は、原則として、著者名、論文名、書名・雑誌名、巻数、出版年、頁の順に記す。
5. 本文見出し番号の打ち方は、次のとおりにする。なお、大きい見出しには1行あける。
1 2 3
(1) (2) (3)
① ② ③
a b c
6. 表、図・写真等はなるべく簡潔にし、その枚数は必要最小限にとどめる。
 - 1) 表、図は1点ずつ白紙か薄青紙の方眼紙に明瞭に書き、表1、図1のように番号をつける。
 - 2) 図は著者提出のものをそのまま写真製版して掲載するので、墨入れすることが望ましい。必要に応じて25%から400%の範囲で縮小・拡大のみを行う。
 - 3) 写真の場合は、手札以上の白黒焼き印画を用いる。
 - 4) 図・写真等に文字を入れる場合は、原図の上にトレーシングペーパーをかぶせ、そこに鉛筆で記入する。
 - 5) 図・写真の解説文は、1枚にまとめ、原稿の末尾に付ける。
 - 6) 表、図、写真の挿入位置を原稿の欄外に指定する。
 - 7) 原図の下の余白には、執筆者名、図の番号、縮尺を、鉛筆で記入する。

VII 査読

1. 査読者は原則として2人とし、論文の表記、内容に関して助言することができる。
2. 執筆者は助言に基づき原稿に加筆・修正するものとする。
3. 査読終了後の完成原稿の訂正は認めない。

VIII 校正

1. 校正の際、論題及び原文の変更は認めない。
2. 執筆者による校正は、本文は再校までとし、表、図等は初校のみとする。
3. 校正は赤字で明記し、期日までに行う。出張等で止むを得ない場合は生涯学習研究所に連絡するものとする。
4. 校正記号は日本工業規格に準拠するのが望ましい。
5. 終了後から発行までの間に、新たに出版された論文等を引用する必要がある場合は紀要委員会の承認を得たうえで、本文末尾に「付記」として加筆することができる。
6. 表記やフォントの統一、明らかな誤字脱字は事務局で修正する場合がある。

IX その他

1. 紀要刷りあがりレイアウトは、題名、副題、執筆者名、要旨、文献、書誌リスト、注、表、図・写真等を含めて8ページ以内である。
2. 原稿、電子媒体等は、紀要の完成後に執筆者に返却する。
3. PDFでの紀要の納品がある。